メキシコ寸感

国松　登

メキシコといえば灼熱の太陽とサボテンやソンボレイヨ（つばの広い帽子）などを連想するが，主都メキシコシテイはアメリカの陸つづきで市の中心部はアメリカの古い都市を想わせる幅の広い高速道路と商店街や銀行が建ち並び，郊外には大きなスーパーマーケットなどのある堂々たる市街である。

メキシコシテイは海抜2,500㍍くらいの位置（富士山の7,8合目にあたる）にあるので熱帯に属するこの国の中でも気温は低く夏もしのぎ良いが，一晩急行バスで下ると気温もグンと上がり一年中海水浴の客で賑わう美しい海岸に出ることもできる。

私の滞在中（9月から10月半ばにかけて）も家の中は涼しく，日中でも木蔭で暑さをしのぐことができる程度であった。

メキシコでは夕方から夜にかけて定まったように雷（かみなり）をともなった土砂ぶりの雨がやって来た。高地のせいかその雷が物凄く近く，私の軀には恐ろしいくらい強く感じられた。

しかし雨のあとは美しい星がきらめき，外灯の下ではブガンビリアの紅い花が妖しく輝いた。

最近メキシコの美術が世界の関心を集めているが，わが国においては戦前メキシコから帰った北川民次氏がメキシコの風俗をあつかった多くの作品を発表し，同時にメキシコの児童画を紹介したが，その土俗的な特異な水彩画が当時わが国の美術家の関心を集めたことがある。

さらにメキシコ美術の評価を高めたのは数年前に上野に開かれたメキシコ美術展以来のことである。リベラ，タマヨ，シケロスなどの油絵をはじめ，遺蹟の一部や出土品，古代の装身具，民芸品などの風土性に富んだ出陳に高い関心がはらわれた。

またメキシコは壁画の国としても広く世界に紹介され，その巨大な壁面と広大な空間に打ち樹てた建造物の装飾画は近代まれに見るものといえるだろう。しかも公共的建築（政庁や大学，博物館など）の壁画にみられる一連のテーマ絵画はソ連などと共に国家的規模を持つ壁画といえる。

昨年9月に世界美術評論家会議がメキシコで開かれた（わが国から近代美術館の木間正義氏が出席）のも，世界の美術研究家の関心がそこに集まったからに違いない。

ユカタン半島の一角からスペインの侵略があったといわれる古い歴史の以前から，この国の地下にはまだどのような美術品が埋蔵されているのか計り知れないものがある。現在の地表に現われているピラミッド（エジプトのピラミッドは墓であるがメキシコのピラミッドは上部の平坦な祭壇であった）や数々の遺跡の他，未発掘の巨大な遺蹟がまだこの大陸の方々の地下に眠っているといわれる。

このような背景の中から現在のメキシコは世界の画壇に数人のチャムピオンを送り出しているが，それらの画家の最近作には必ずしもメキシコの風土が強く滲み出ているとは思われない。

例えば昨夏アメリカのシァトル市で開かれた21世紀博覧会の中の「世界現代絵画展」に出品された各国作家の多くの抽象作品が示す共通性について，私には一つの疑念が残るのである。あるいはこれが世界共通の現代語かも知れない。しかしその会話は世界標準語のような一様の響きをもっていても独自な主張に欠け，一様な言葉の響きによって言葉の内容までが一つのものに感じられるのも不思議であった。

だが耳をよく澄ましているとこの標準語の中からメキシコ作家のかすかな訛りのようなものが聞こえて来るのである。強いていえばその言葉の訛りから僅かにメキシコの風土を感ずる程度であった。

風土や民度の濃淡は必ずしも芸術の尺度とはならないが，今日のように美術が〈造型言語〉などと呼ばれ，世界の共通語として一堂に会する機会の多くなった時にこそ，各国の歴史的背景や，民族文化の思考する方向がはっきりと示さるべきではないかと考える。

その点ではさすがにフランス，イギリスやイタリーの一群の作家たちは，その誇るべき伝統と現代的視点に立って堂々たる発言をしていた。

メキシコ国内の壁画が示しているものは大部分メキシコの独立にまつわる歴史画であるが，この厖大な壁面を提供した政府の施策が今日メキシコ絵画を世界に標榜し，美術の国としての認識を広めたが，現代のメキシコ絵画に対し，多くの美術的遺産や大壁画によって総括的なメキシコ絵画の概念をつくってはならない。

現在はむしろ幾人かの代表画家を国際画壇に送り込むシステムも出来上っているし，街の画廊の個展なども巴里の画廊並みのベルニサージュで幕あけをしている。

市の中央部にはたくさんの画廊があり，画廊に出入する客や画家の数も多い。

街の小公園（札幌の大通り公園のような遊歩道）には日曜ごとに無名の各国画家の野外展が開かれ，1日2ペソを支払えばわれわれエトランゼも店をひろげることができる。

私がメキシコをはなれる日も近づいた頃，国立博物館（歌劇や音楽会なども開かれる）でJ. R. Ferreira氏の200点近い個展をみたが，大部分がグワッシュと透明水彩による民画（日本の東北地方の凧絵などを思わせる）のようなもので，メキシコの民芸品にみられる風土性を強く感じた。

私は美しいメキシコの空と巨大なサボテンと低い田舎の民家，そして最後にみたこの個展のイメージを抱いてメキシコ空港を飛び発った。

北海道で生まれる!!
トーヨーゴム靴
東洋ゴム工業株式会社　札幌トーヨーゴム株式会社

イーゼルペイント
いーぜるぱす
資生堂
えのぐ